
彼らがくれたプレゼント

桜草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らがくれたプレゼント

【Zコード】

Z3015D

【作者名】

桜草

【あらすじ】

「ナンたち少年探偵団は、クリスマス会を計画した。唉はバカバカしいと感じながらも出席する。ところが・・・。

クリスマス。

聖なるイエス・キリストのおめでたい誕生日。キリスト教でもない人々も、やれサンタだのプレゼントだの騒いでいる。

バカバカしい・・・。

我らが少年探偵団たちは、クリスマス会をやろうとしていた。
1週間前、放課後・・・。

「哀ちゃん！」「ナン君！クリスマス会やるひつよ！」

吉田さんの突然の問いに戸惑つ。

「え？クリスマス会？」

円谷君が咳ばらいをし、笑つて言つた。

「歩美ちあさんたちと僕らで計画したんですよー。楽しこですよー。プレゼント交換とかー！」

「つまごモノもあるしなー。」

チラリと横の彼を見る。

なんと彼は大人げなく、口の端を上げ嬉しそうに笑っていた。

「ああ、いいじゃねーかー。楽しそうだ。やひひせー。」

いきなりの返事に慌てる。

別にやりたくないわけではなかったが、子どもっぽい彼の笑いに感づ。

「あら何?名探偵さんも長い間、子どものままだと精神も幼くなつちやつかしくなつ。」

「つたぐ・・・。じうじうそんなこと言つんだよ、かわいげねーな・・。たまにはここかなつて思つただけだよー。」

呆れ顔で見てくる。

「つたひの方が呆れたわよ、まったく・・。」

そんなことクリスマス会となつてしまつた。

「ねえーー・プレゼント交換やるから集まつてよーー。」

吉田さんが大きな声を出して、いつまでもケーキを食べ続けている
小嶋君を呼ぶ。

現在の出席者は、小嶋君、円谷君、吉田さん、博士・・・そして上
藤君。

博士がラジカセを持ってきて言つた。

「じゃあわしは音楽を鳴らすから抜ける」とさつたら
回す手も止めるんじやぞ。
じゃあスイッチON!」

明るい音楽が流れてきた。

どんなプレゼントでも良かつた。

少年探偵団のみんなが、一人一人考えて買つてきてくれたのだから。

音楽が鳴り止み、私のといひ回り始めたのはいくぶん小さな箱。
なにかしづ・・・。

「うわあーーこれ、なんだあー。」

小嶋くんが手にしていたのは、なんとファッショング雑誌。

『今年の着こなしポイント』と書かれていた。

「あーそれ歩美のプレゼントだよ？元太君は使わないと思つからお母さんにあげたら？」

吉田さんが小嶋君に向かって、にこりと笑っていた。
無邪気に本当にきつここと言うのね・・・。

思わずクスリと笑つてしまつた。

「歩美はこれ！なんかステキなバック」

フサエ・ブランド・・・もどきのバックだつた。

「あ～それ俺から。歩美ちゃんに当たつてよかつたよ。元太や光彦
だつたら使い道ないもんな。そういう一俺の当たつたもの・・・新
名作の推理小説だぜ！」

「あら・・・それ、私からのプレゼントだわ。感謝してね、残り1
冊だつたんだから・・・。」

そり、それは誰にあたつても良いように買ったつもりだがやつぱり
この人に当たるのが一番ね。

喜んでいる彼を見て、そういう気持ちになつた。

「何ですかこれ？ビック大阪のストラップですか！」

「へ～ここは東京なのに、そんなもの買つ人もいるよつね。
でも私じゃないとすれば残るは・・・」

「ああ、それ俺から！前に母ちゃんが大阪言つた時、お土産に買つ
て来てくれたんだけどよおやつば東京ファンだからー。」

ふ～ん小嶋君らしいわ。

食べ物かと思ってたけど、意外と気が利くものよね。

そして私のプレゼントは・・・

開けてみると、小さなかわいい動物のマスコットが入つていた。
思わず感嘆の声をあげる。
とてもかわいらしかった。

「あ、それ僕からです！その・・・氣に入つてくれたでしょうか？」

円谷君が、顔を紅潮させながら言つてくれた。
照れているのだ。

「ええ、とっても嬉しいわ。ありがとー。」

本当に嬉しかった。

横からは満足そうに、工藤君が笑っていた。

しかし・・・

「博士ー！ケーキ、作ったの。コナン君も食べない？あれ？みんなそろってるんだ！」

も・・・毛利さん・・・。

自分が一番苦手な人物。

いつしかあの人恋心を持つてからそう感じていた。
それと同時に姉と似ている人として、見てるだけで辛くなる。

「あれ？哀ちゃんどうしたの？みんなで一緒にケーキ食べようよー。」

思わず身体が震える。

みんな楽しそうに料理を食べては会話をしている・・・。

幸せそうだ。

じゃあ・・・じゃあ私は?

1日1日、のんびり楽しく過ごせるなんて考えていなかつた。

いつ命がなくなるか、分からぬ。

そう感じた。

幸せとなる人、不幸せとなる人・・・引き離さなければならぬ。

危ない日にあわせないためにも・・・

もつゝれで最後のクリスマスになるかもしけないわね・・・。
そう思った瞬間、涙が一滴・・・

あわてて家を飛び出す。

「あゝ哀ちゃん!」

「灰原さん!」「灰原!」

毛利さんと彼らの声が響く。

「灰原ア!!--」

あの人への声も聞こえた。

私はそのまま、走り続けた。

気がついたら、あたりは完全に真っ暗。
星が輝いていた。

『毛利探偵事務所』

見上げた窓にはそう書いてある。

もう、ずっと一人ぼっちかもしれない。
仲間をおいて、逃げ出したのだから。

なぜか笑ってしまった。

自分自身に冷笑した。

「何やつてんだよ、バーロ。」

・・・え？

工藤君？

「じゅうじゅうヒーリングで頬をほぐして……」

「分かるさ。蘭が来てから、お前すげにおかしかつたからさ。蘭が苦手なのは分かつてたけど……そこまで嫌いかよ。」

「きつ嫌いじゃない……でも……ま、これはあなたには言えな
いわ。」

そう、嫌いではなかつた。

もつて生まれた場所が違うのだから。

「・・・なあ光彦たちがいきなりクリスマス会やるって言つた理由、知つてるか？」

「え？」

「おめーのためだよ。最近元気なかつた灰原に、クリスマスプレゼントとして祝つたんだ。」

知らなかつた。気づかなかつた。

そんなに私のことを心配してくれるなんて、思いもしなかった。

「だからプレゼント交換の時のプレゼントが、私好みの物ばかりだ

つたのね・・・。」「

「そういう」と。おめー最近心配しそうじゃねーか?灰原は絶対人じゃない。仲間がいるだろ?」「

そうだ。

仲間がいる。信じられる人がいるのだから・・・。

純粋で・・・逞しくなったわよね。少年探偵団。

「それと・・・」

「え?」

彼の手から出てきたのは、サンタの格好をした私の人形。手のひらサイズの私の人形。

ずいぶん下手だが、心がこもっている感じがした。輝いている・・・。

「おっ俺が作ったんだよ!ちょっと上手く出来なかつたけど・・・。そのおめーが喜ぶかと思って・・・。」「

私の人形は明るい笑顔をしていた。

一生懸命、私のために作ってくれた彼を浮かべると顔がほてる。

本当に嬉しかった。

「あら・・・私の人形でも作って呪いでもするつもっ?」

さすがにムツとしたのか、彼の顔が歪む。

「おめー! なんといふで茶化したりするなよ。」

ふふっと笑つてみた。

本音を言つ。

きっと初めてだ。

「でも・・・あなたが一番最初にくれたものだから・・・大切にす
る。ありがと・・・。」

彼の顔が一気に赤くなる。
照れてるんだ。

こんなこともあるのね。

「ハナソベーんー! 哭けやんー!」

毛利さんの声が響いてくる。

今度は振り向いていられた。

震えはもう無い。

逃げなくともいい。

そう考えるだけで楽だった。

空には綺麗な星が輝いている。

聖なるキリストさんや二四〇リスさんにも感謝しなきやね。

3人は雪振る空をずっと、眺めていた。

(後書き)

ひとつも桜草です。

クリスマスとこりこりと、初めて短編を書いてみました！

・・・いやもう、本当に難しいです。描写とかほとんど出来なくて・
・・。（泣）

こんな小説ですが、感想・評価してくださると励みになります！よ
ろしくお願ひします！

やつぱ哀はクリスマスが似合つた〜と思つてしましました。冷静さ
がかけてしまいましたが・・・。

これからもよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3015d/>

彼らがくれたプレゼント

2010年10月11日10時44分発行